

特集 米国の大学院生活

ハワイ大学の院生生活

住 明 正*

ハワイに着いてから、早いものでもう9カ月が過ぎました。ハワイでは、日本と全く同じような(ある意味では、今の日本以上の)日本的な側面と、全く異なるアメリカ的側面を見出し、驚くやら、とまどうやらの毎日でした。それでも、月日のたつうちに、心の余裕もでき、少しは冷静に、世の中のことが観察できるようになりました。なかでも、アメリカの大学院生の生活は、(自分の経験した、あるいは、他人から聞いた)日本の大学院生の生活と相当に異なっている印象を受けました。また、日本では、大学院生の問題は、就職の問題と関連して、大問題の様に思いますので、こちらの学生の生活を紹介しながら、少し私の感想を書いてみたいと思います。日本の大学院の問題を考える際の一つの参考になれば幸いです。

こちらの学生の生活について最初に驚いたことは、彼らの大部分が自分の所属する教授の研究費で、備わっているという事実です。こちらの大学では、staffのほとんども、予算的には、教授の研究費の枠内で雇用されているのですが(このこと自体も、非常に奇妙な感じを受けましたが)、大学院生も、一応これらと同じ範疇に入るわけです。彼らの為の職業として、teaching assistant (TA)-I or II, あるいは、research assistant (RA)-I or II (Iは master の学生、IIは Ph. D の学生と考えて良いと思います)という職業が用意されています。それぞれの職業には、日本でいう号俸は二つしかなく、何年いても昇給ということはありません。ただ、インフレの進行と共に、改訂はあるようです。最近、大学院生の自治会が、要求書を出し、賃上げ交渉の結果、新しい賃金が発表されていました。それによると、だいたい、日額 550 ドル前後というところですが、これは、half time の給料です。Graduate student は、1日の半分は備われ、労働し、あとの半分で、勉強しろということなのでしょう。学生に聞いてみると、一応この額で、アパート

を借りて、一人が生活してゆくことはできるそうです。その学生は、「飢えはしない。そして、時には、セーターの一つも買える」と言っていました。周知のように、ハワイは全米一物価が高いところですから(ほとんど東京と同じと思います)、そこで暮してゆけるのですから、他の場所なら、まあ容易なことと思います。

ところで、このような給料が支給されるか否かは、学科によるとのことで、つまり、多くのプロジェクトを持っている学科と、そのようなものがない学科(ある学生によれば、「(そのような学科では)教授がサポている」のだそうですが)があるわけで、少なくとも、その辺りの事情、つまり進学した時に、RA などに備ってもらいか否かの事情については、事前に問い合わせることができるとのことでした。

その他に、こちらの学部学生も、student help と呼ぶのですが、授業の合い間の暇時間に、各研究室のアルバイトとして備われ、研究の下働きなどを行っています。もちろん、この pay も、経験により異なるわけです。これなどは、自分の学部の研究室に勤めたりすれば、非常に有効な教育形態とも考えられ、しかも、金が稼げるとあっては、学生にとっても非常に有利な system と思いました。事実、student help から、その研究室の staff になったり、graduate student になったりする例もあるようです。アメリカでは、実務の経験というものには相当に重く評価されるらしく(つまり、ある職種に採用され勤めて来たということは、その職業を実行するに備える能力を持っていることの証明だということだと思います)、学部学生の時代に、自分の専門分野での労働の経験を持つことは就職の際の条件として非常に有利のようですから、大部分の学生は、夏休みにこのような仕事を捜すみたいです。

このように、大学院生の位置づけは、日本と比べて考えると、非常に興味深いものがあります。

日本の場合には、大学院時代の生活費すら、原則的には、奨学金という借金でしかなく、その生活の不安と、

* Akimasa Sumi, 気象庁電子計算室。

身分の不安定さが、ともすれば大学院生の問題を複雑にしていると言えますが、アメリカのシステムでは、大学院生は、一応、教授に備われ、指導を受ける、というようになり、学生の身分も安定していますが、反面、ある意味では、教授の優位性が確立されているように思われます。同時に、大学院生時代の生活費が借金でないという点は、学位取得後の行動範囲を保障し（日本の場合は、奨学金の返済の免除が公共機関の研究職、および、大学等に限定されているため、どうしても、少ないポストに群がることになると思います）、さらに、学位をとるまでに充分の時間をかけることができるように思われます。（ここハワイの HIG=Hawaii Institute of Geophysics では、平均5年とのことです。）

さらに、大学側が（教授側が）、金を出し、生活の面倒をみながら、学生を教育して（やっ）ている、という図式は、大学側に圧倒的な精神的優位性を与え、就職に関しても、大学側が一切面倒をみない、という態度を可能にしているような気がします。つまり、「（金を払ってこれだけ教育してやったのに）職がないのは、お前の責任だ（お前の能力の問題だ）」と言い切っているような気がします。日本の場合は、この辺りが曖昧で、「高い授業料を払い、生活費をかけて学校へ行ったのに、就職も世話してくれないとは……」というように、大学側に義務があるかのような社会的通念になっているように思えます。少なくとも、学生の側からみれば、大学側がなんとかするべき義務があると心情的に思い得る下地があると思います。もっとも、アメリカのこの system は、一応、学位をとれば、就職口があるという事情によって支えられているような気もしますが。

次に、アメリカで学位をとるには、comprehensive examination というものを pass しなければならないことです。これは、学部からの勉強のおさらいみたいなものらしく、なかなか大変のようです。普通は、Ph. D のコースに入って1年目にこの試験を受け、その後、論文の提出に向けて研究を続けるとのことです。

さらに、アメリカは、学部の時から成績主義で、試験の成績が90点以上をA、80点以上をB、70点以上をCというように採点し、各科目の成績を、Aが4.0、Bが3.0、Cが2.0というようにして平均したGPA (=Grade Point Average) が重要のようです。特に、医学部などに進学する時には、このGPAが重要になります。（この大学（院）進学の問題については、少数民族の問題など複雑な問題があるようです。）一般的に、Ph. D のコー

スでは、2学期続けて、GPA が3.0を切ると退学とのことです。

一般的に、アメリカでは、学位をとることが、（大学か研究機関の）就職の条件になっており、また、一つの資格として民間でも認められているため、ほとんどの学生は、一心不乱に学位をとるよう努力しているように見受けられました。もちろん、scientist などの職は期限を限られたものがほとんどで、学位をとった後も、果てしない生存競争が続くように思われます。

ハワイにも、数多くの日本人が Ph. D を目指して頑張っています。彼らの多くは、言葉のギャップと孤独に耐えながら、良く頑張っていると思いました。特に、口答試問などで自分を defend しなければならず、しかも、答案なども全て英語で書かねばならず、語学的な点でも相当にしんどい仕事のように思いました。さらに、彼らのほとんどは、日本での就職を希望している為、つねに、心の一つは日本の方を向いており、就職が決まるまでは、やはり、ある程度不安を禁じ得ないようです。それに、「こんなに努力しているのに、日本では、アメリカでの Ph. D を、それほどには評価しない」という点に、相当の不満を持っているようです。総じて彼らの結論は、「日本より、アメリカの方が、学位をとるのはたいへんなのに……」というものでした。

また、余り長くアメリカにいると、人間関係の作り方がアメリカ的になり、日本で適応できるかどうか不安だと冗談めかしている学生も、いました。

僕の感じでも、アメリカでは、それほど周囲が面倒を見てくれるわけではありませんので、なるほどたいへんだなあ、とつくづく再認識した次第です。

ここハワイは、アメリカの中の日本（あるいは東洋）という感じでアメリカ本土から来た日本人や中国人は、やはりハワイに来ると、ホッとすると言います。とにかく異なる文化の中で生活するという事は、相当に、心に緊張を必要とするものだということが、しみじみと分かりました。

最近の日本人は、（日本が豊かになったせいかな）、総体として、日本に里心を持っていますが、台湾や韓国や香港から来ている学生は、できれば米国の市民権を得たいと思っている学生が多く、その頑張り方は、やはり、違うものがあるようです。その点では、日本人は、一部の例外はあるものの、やはり、日本が一番暮らし良いと考えているようです。